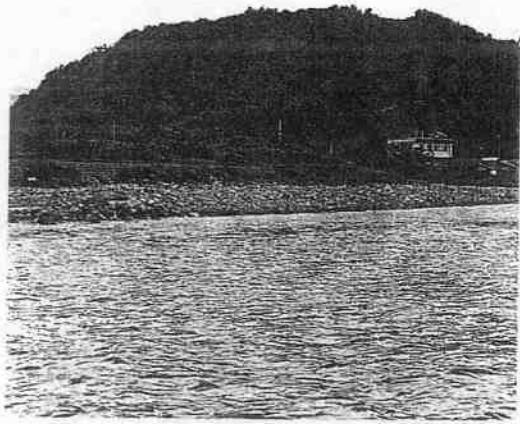


“十六島湾の台場”

今年の大河ドラマ「徳川慶喜」は、激動した幕末が舞台である。一般には、黒船の来航によつて太平の夢が破られたと思われてゐる。しかし、異国船の領海侵犯事件は幾度となく起きていた。これに対し、幕府は強硬な異国船打払令を出し、



河下の台場

アヘン戦争で清国の大敗を知ると軟柔な薪水(しんすい)給与令に改めていた。良好な入江をもつ古里は、現在も密航者の標的となつてゐる。黒船来航より百三十五年以前に、十六島湾沿岸では大きな事件が起きていた。騒動は享保二(一七一七)年四月、異国船が美保の関に、五月には河下、小津

ふるさとぶらり
見てある記

沖に船影をみせた。八月になつて再び十六島浦の沖に十日間も留まつて姿を消した。

舟の上に屋根ありとするのに、付図は赤い中国風に描いてゐるのは謎である。八十年後、ロシア軍艦が隠岐に現れるに到つて松平藩は、「唐船番(とうせんぱん)」と称する特別軍を組織する。その付属施設に遠見(えんけん)番所と台場を設置した。

黒船来航から各藩自領の保護のため、こぞつて海防体制の強化を図つた。ことに文久年間には攘夷の嵐が吹き荒れた。この渦中であつて松江藩の戦略は他藩に秀でていた。機動性の無い台場に重きをおかず、軍艦を購入して軍事力を飛躍的に向上させた。しかし、

物や柵、まして大砲の姿は失われているが概ね当時の姿を残している。しかも現在県内で台場が現存している希少な例である。台場の下の浜辺において潮風に吹かれてみると。黒服に赤いマントル、光る銃を肩にした訓練の喧騒が潮騒の中に聞こえる。沖ゆく白い船は尊い平和を象徴するが孤高なり。いづくとなく海鳥の賛歌が流れた。(西尾良一市文化財審議員)

明けて三年春に、十六島に再来航し美保の関へ廻つた。ここで異国船は発砲しながら陸地に近づいた。この事態を重くみた幕府は松江藩に打払を命じた。同年七月十一日河下に異国船の来航が報じられるや家老以下百余名が急遽派遣された。十三日の未

遠見番所とは、台場と連結した海上の見晴らしのきく高山に設けられた監視哨。台場は、海岸に

築かれた露天の迎撃用の火砲陣地である。陣地のみで常時火砲の備えは無かつた。臨時的なものを含めて藩内に二十数か所が随時築かれた。中でも九か所は重要視され、ことある毎に藩主の巡検を受けた。無論、十六島湾には二か所の重要台場が築かれた。十六島鼻の中段に位置する網屋浜と河下

の川口右岸の釜屋浜に。一つの湾に二か所の台場を築いたのは松江城の背後にあたる恵曇湾とここだけである。市内の二つの台場は、藩内では稀な石垣で基壇を築いた堅固なものであつた。

県内最高の完成度

明には垂水から河下にかけて大砲五門、大型鉄砲十三挺、布施から小津の浜へは小筒四十挺で布陣が敷かれた。浜から船まで一、七キロ、重さ〇・八キロの初玉が帆柱に、次発〇・四キロ玉が帆を打ち切つた。驚いた船は櫓を仕立て沖へ沖へと出ていったと記録されている。この異国船の記述は黒船で

築かれた露天の迎撃用の火砲陣地である。陣地のみで常時火砲の備えは無かつた。臨時的なものを含めて藩内に二十数か所が随時築かれた。中でも九か所は重要視され、ことある毎に藩主の巡検を受けた。無論、十六島湾には二か所の重要台場が築かれた。十六島鼻の中段に位置する網屋浜と河下

釜屋浜は製塩業をおこなう塩釜があつた。このため河下台場は中央のない東西二基からなる両端百五十米の完成度は県内最高の台場であつた。二つの台場には建

- 山陰中央新報 平田地区販売所
- 「一畑口」 吾郷 剛
 - 「平田」 山本哲也
 - 「鰯淵」 高橋貞雄
 - 「東」 土江光江
 - 「佐香」 山岡良一
 - 「国富」 松浦澄子
 - 「桧山」 土江春栄
 - 「西田」 郷原哲郎